

自分自身をみる能力の喪失について 統合失調症と自閉症の発達心理学による説明

ラインハルト・レンプ著
高梨愛子・山本 晃訳

星和書店, A 5 判229頁, 2,900円, 2005年11月刊

(東海大学) 小林隆児

主に青年期以後に発症する統合失調症と幼児期早期に発症する自閉症という2大精神疾患の異同は、精神科医にとって今日でもなお強い興味をそそる古くて新しい問題である。本書はわが国でもよく知られているドイツの児童青年精神医学者レンプ氏による統合失調症と自閉症との関連について発達心理学的視点から論じた魅力ある書である。

生まれてしばらくのあいだ、子どもはさまざまな生活体験を自己固有の世界として意味づけていくが、著者はこの世界を隣接現実と呼ぶ。まもなく子どもたちは周辺他者との対人交流を通して共通の意味を持つ体験世界をつくるようになる。この世界を隣接世界と区別して共通の現実ないし主現実と呼ぶ。子どもは発達過程でこの隣接現実から主現実「乗りかえ」ることによって、他者とともに生きることが可能になる。この共通の現実(すなわち共同性)を獲得することによって、人間は初めて「自分自身をみる能力」を獲得することができる。この「乗りかえ」が生まれた当初から不可能あるいは非常に困難な状態にあるのが自閉症であり、この「乗りかえ」能力が一時的には獲得されたにもかかわらずその後何らかの理由で喪失したのが統合失調症であると著者はいう。

「乗りかえ」を妨げている個体要因として「部分能力障害」(これを基底障害と呼んでいる)と、養育環境要因として「矛盾する早期幼児期の経験」を挙げている。「部分能力障害」は微細脳機能不全(MBD)あるいは学習障害を指し、「矛盾する早期幼児期の経験」は二重拘束に代表されるような子どもにとって矛盾した情報にさらされることを示している。生誕後の生活体験を他者と共有可能になるためには、子ども自身が刺激を他者と同様に知覚するということが不可欠であるが、部分能力障害はそうした刺激受容と処理に歪曲をもたらす。

さらには矛盾した情報にさらされると、子ども自身の生活体験そのものが共通し安定した意味あるものとして伝わらないことになる。

このように著者の両疾患に対する発達心理学的理解は、生来的な個体要因と環境要因をともに重視するとともに、幼児期の対人関係の経験の質的問題(関係障害)をも取り上げている点で、評者にも大変共感できる内容である。

訳者の1人山本は、著者のいう「自分自身をみる能力」の障害は今なおわが国では盛んに取り上げられている「心の理論」障害と同じであるというが、「心の理論」障害仮説に比べると、より関係論的、発達論的な萌芽を持つように思われる。

本書を読んだ後に評者が興味を抱いたのは、「乗りかえ」を困難にしている関係障害の内実そのものである。「矛盾する早期幼児期の経験」は、子どもと養育者のあいだに生まれたアンビバレントな関係の中で生まれていくが、それが具体的にどのような中味を持つのかということである。発達心理学的視点の意義は、まさにそこにどの程度深く食い込めるか否かにかかっているからである。その意味からも同じドイツ語圏の発達心理学者H. Wernerの仕事がまったく参照されていないのは不思議である。

原書ではなかなか触れる機会の少ないドイツ児童青年精神医学を代表するような本書をこのような形でわれわれ読者に提供していただいた訳者の労に敬意を表したい。ただ、日本語としては読みづらい箇所が少なからず散見しているのが悔やまれる。

原書 Reinhart Lempp: Vom Verlust der Fähigkeit, sich selbst zu betrachten.

こころだって、からだです

加藤忠史著

日本評論社, 四六判並製246頁, 1,500円, 2006年1月刊
(福岡大学) 西村良二

著者は、理化学研究所脳科学総合研究センターに勤務する精神科医であり、研究チームのリーダー